

5号小堅穴から出土した有孔鍔付壺（高さ39cm）



平安時代灰釉碗・灰釉皿



鉄鎌と石突

序

井戸尻遺跡は、中部高地における縄文時代中期の標式遺跡としてついに知られている。昭和33年と40年に発掘調査がなされ、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが判明している。ことに縄文時代は、中期前葉から末葉まで營まれた母村的な集落跡である。

昭和41年6月に国の史跡に指定され、整備をすすめるいっぽう、国庫補助をうけて史跡の買い上げをはかってきた。現在、指定面積11,307m²のうち8,644m²が町有地となっている。さらに平成4年度には、地域文化財保全事業の指定をうけ、周辺の環境保全をすすめているところである。

この度の報告書は、遺跡の南端側を横断する農道の建設に先立って緊急調査された第三次発掘の記録である。この中で特に注目されるのは、早期茅山上層期の環状集石造構であろう。これまでには、勝村原村の阿久遺跡で発掘された前期の環状集石造構がもっとも古かったが、それより更に遅ったことになる。全国的にも殆ど例を見ない造構の発見は、井戸尻遺跡の実態把握に大きな成果をもたらしたと言ってよいだろう。

この間、発掘調査ならびに整理作業にご協力いただいた関係者のみなさんに心からお礼申し上げる次第である。

平成6年3月

富士見町教育委員会

教育長 名取 剛三

例　　言

- 1 本書は、農林漁業用揮発油税身替農道整備事業に伴い、調査地方事務所の委託をうけて富士見町教育委員会が実施した井戸尻遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、平成3年7月10日から平成6年3月22日まで、二度に分けて行った。
- 3 遺構図の水準線は標高857.0mを0とし、高低を+・-で表示した。
- 4 本報告にかかる出土品、諸記録は井戸尻考古館が保管している。
- 5 早期の土器については、量の多少はあれ、全て植物質の纖維が含まれているが、とくに明示していない。
- 6 発掘調査は小林公明・樋口誠司が担当し、本書の執筆および編集は樋口誠司が行った。
- 7 早期の土器群については、金子直行氏より御教示を戴いた。記して謝意を表する次第である。

目　　次

序
例　　言
目　　次

1 遺跡の環境と調査の経緯	1
遺跡の環境	
調査の経緯	
調査のあらまし	
2 遺構と遺物	4
旧石器時代	
縄文時代早期	
縄文時代中期	
平安時代	
近世	
3 成果と課題	18

1 遺跡の環境と調査の経緯

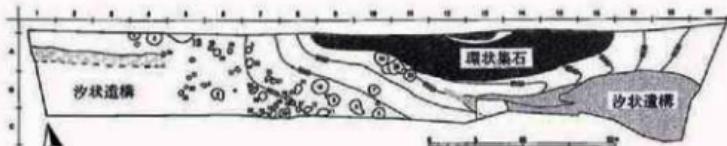
遺跡の環境 井戸尻遺跡は、池袋区が所在する台地の先端が比高差およそ20mの急斜面となって消失し、そこからふたたび尻尾のように南に伸びる、標高870～855mの尾根上に位置する。東西の最大幅100m・南北300mの範囲である。東西ともに比高差5～6mほどの浅い沢によって仕切られている。西側の沢を隔てては曾利遺跡の尾根筋が並行している。

台地のまさしく尻に相当する縁辺の所々からは、「井戸尻」という地名の由来となった清水がわき出ている。特に遺跡の北東側の溶岩の隙間から出る湧水は水量が豊富で、現在は養鷹場の水として利用されている。地元の古者によると、かつてここは農耕などで疲労した馬のからだや脚を冷やした場所で「うまひやしば」と呼んでいたことがあるという。

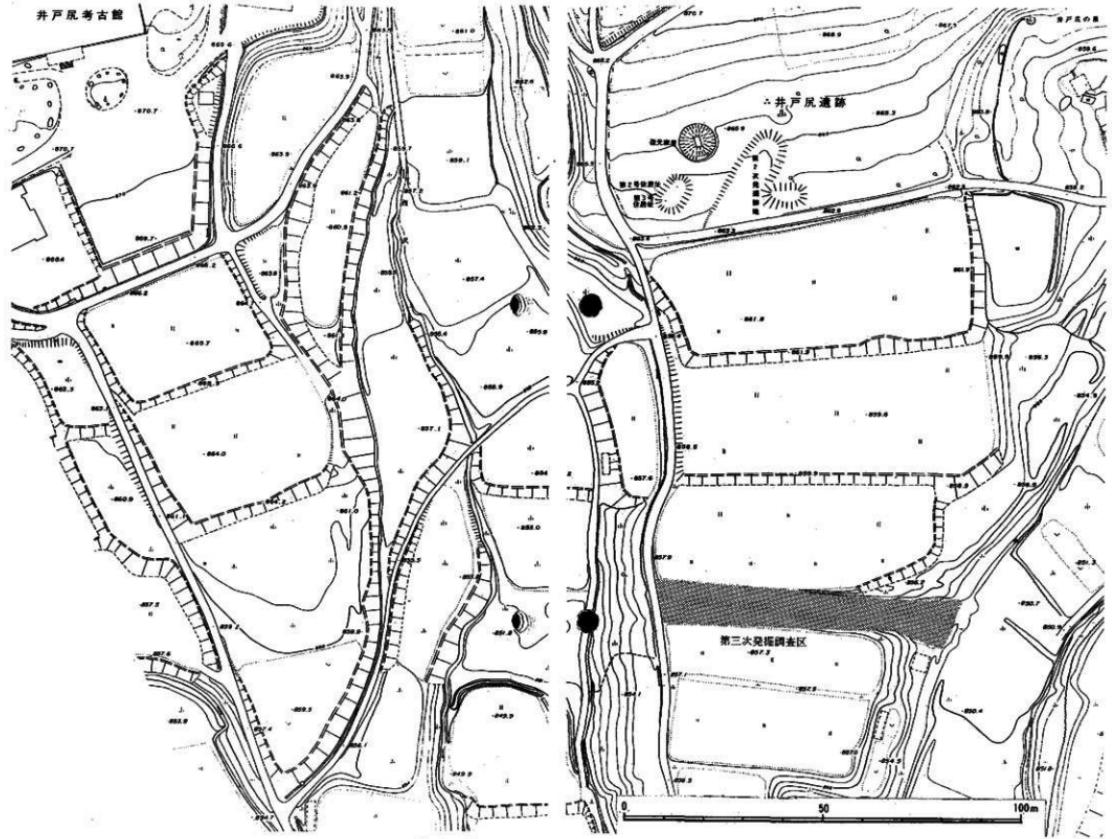
調査の経緯 今回、調査の対象になったのは、尾根の下手に当たる箇所である。農林漁業用揮発油税身替農道整備事業の富士見南線がこの地点を横断するため、平成2年9月4日に、長野県教育委員会、諏訪地方事務所、富士見町教育委員会の三者で協議を行い、工事に先立って発掘を実施することになった。

調査のあらまし 調査区が田の下手側で、土手が高く築いてあり、埋めた土が相当量あることが予想された。東側の斜面は、ボーリングステッキによる探査から、地山まで浅い箇所で120cm、深い箇所でそれ以上であることが判っていた。まず、埋土を除去する作業を重機で行ったが、予想どおり厚く、加えて幅員があって左右に土を振り分けねばならず、手間取った。ちなみに、開田の際に埋めた土の最も厚い箇所は210cmであった。

基本の層序は、開田時に埋めた土の下からI層～IV層まで付した。このうち、第VI層は人為的にもつた土である。発掘は、西から住居址、小窓穴の順に行った。III層の上面、7～13グリットにかけて、拳大から人頭大の礫が面でとらえられたが、一定のまとまりや規則性は認められなかつた。これらの石を取り除いて少し下げるとき、11～12グリットにかけて大小の土器片や半完形の土器のほかに、安山岩の礫や各種石器がまとまってあらわれた。これを遺物集中区とした。IV層にはいると早期の土器と拳大から人頭大の礫が現われた。帶状を成すものの、規則性は認められなかつた。9グリットあたりからは次第に傾斜して支谷が深くなり、IV層は厚い箇所で80cm近くもなって、調査がなかなか進まなかつた。



第1図 遺構配置全体図 (1:600)



第2図 遺跡周辺地形図 (1:1000)

結果、13グリット以降と10グリット以降の早期の包含層の調査については、五年度に送ることとなった。

五年度は、耕土処理を考慮に入れて16~20グリットを先ず調査し、終了後、10~16グリットの調査を行った。表土をはぎ取ると14杭列から東側に沙が見つかった。16グリットでは、III層の上部から平安時代の遺物が集中して見つかった。IV層に至ると17グリットから早期の集石1基と、1~16グリットにかけて環状集石遺構を検出した。先に調査した9~10グリットでみられた集石は、この一部分であった。集石はV層の上面までみられた。

V層を取り除き、地山の状態を計測して調査を終えた。

2 遺構と遺物

調査区からは、旧石器時代から近世までの遺物と遺構が見つかった。遺構は、南北に延びる尾根に直行するように東へ緩く落ち込む枝沢とその縁辺部に構築されていた。

旧石器時代では、3号小窓穴の南西付近からブレイドが1点出土した。縄文時代では、早期の環状集石遺構、集石1基、小窓穴9基、中期の住居址1基、小窓穴27基、遺物集中区を検出した。平安時代では、遺構こそなかったが、灰釉陶器の碗と皿、完形の鉄鎌と石突が狭い範囲に集中して検出された。

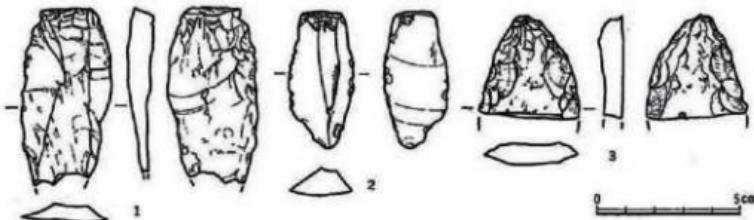
近世では、当時の銭貨である「寛永通宝」が、開田の際に盛った土のいちばん下から出土した。また、開田時につくられたと思われる礎の沢山入った沙がみつかった。

これらのうち、特に注目されるのはやはり早期の遺構のあり方であろう。遺跡東側の沢筋から分歧かれてくる沢の中心にロームのマウンドがあって、それを囲むように集石があり、その外側、沢の縁辺部に小窓穴が巡っている。このような遺構の構築状況は、典型的な環状集落の円環壁造と同じであることから、小窓穴をかこむように沢の縁辺部に住居の存在が予想される。

旧石器時代

第3図1は3号小窓穴の南西50cmのソフトローム中より、背面を表にして出土した。その周辺を入念に削り精査したが、他には見つからなかった。

先端を少し欠くが身は薄く、縁辺は剃刀の刃のように薄い。2・3は9B区出土。2の縁辺に刃、刃こぼれか刃部加工が明らかでない、小さな削離が見られる。1・2ともブレイドで頁岩製。3はポイントの半欠品。玄武岩製の石。



第3図 旧石器時代の石器 (1:2)

縄文時代早期

環状集石遺構 9～16グリットの第IV層より検出された。道路の路線幅のみの調査で、遺構の全体を窺い知ることは出来ないが、およそ4分の1を発掘することができた。

III層の下部の調査で、中期の土器に混じって早期の土器片がかなり目につくようになった。それも、ちょうどこの環状集石遺構にかさなるように、広い範囲から出土していた。IV層との境ですでに拳大から人頭大の礫があらわれたが、まさか下部がこうなっているとは知らず、9・10グリットの一部は測量して外してしまった。しかし、土をする関係で、斜面の調査を先に済ませておいたので、いちどに遺構全体を検出することができたことは幸いであった。

配石は、卵大から人頭大の礫を用い、幾つかは立たせて環状に配している。ほとんどが安山岩で、赤い膜の被った地山の礫もわりと多く、ほかに花崗岩などが使われていた。これらのなかには、故意に割られたものも多く見られた。

集石は、11グリットから16グリットにかけてが稠密で、正円に近い分布を示している。因みに、この部分の直径は約24cmを測る。そこから礫は東西それぞれに帯状に延びていて、全体とすれば東西に長い楕円形を呈するものと思われる。これらのなかには、集石のような石組の遺構はなかった。本址の東の先、18グリットに集石1基と焼土がみつかった。

礫はIV層と、V層の上層までのおよそ80cmのあいだにあり、大小の土器片と石器、黒曜石片が混入していた。石器はかなり目についた。炭は、礫の集中する範囲全体に見られた。土器は整理箱で22箱。石器は5箱で面積のわりにはかなり多い。

IV層の下層、一部V層中で焼土址を6か所検出した。いずれも集石の内側に沿って、等間隔で並んでいる。焼土のなかには、細かい灰が多く含まれていることから、いずれもその場所で火を焚いたようだ。14グリットにある大きな焼土だけは、分厚く固くしまっていた。

本址の特徴といえば、集石遺構の中心にあるロームのマウンドであろう。V層を一部削って平らにし、その上に直径約6m、最大厚56cmのロームを盛ってある。突き固めたようすはないが、土の性質上わりとしまっている。

おそらく、このロームのマウンドを築いてから、これを中心にして、石を環状に配したとおも

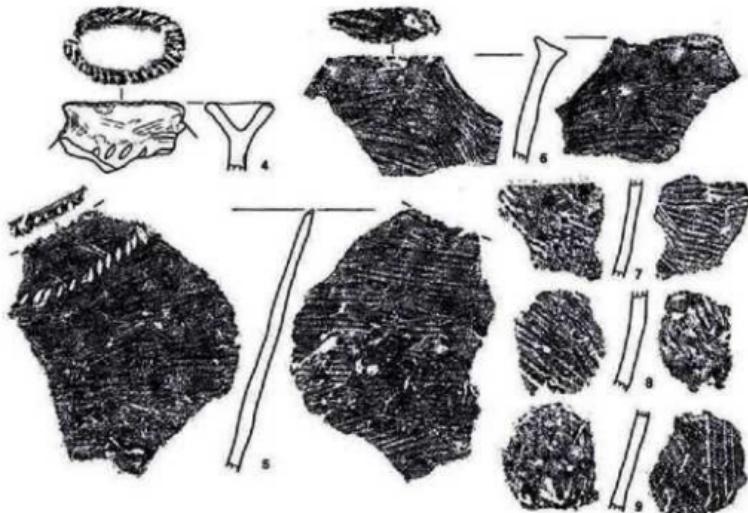
われる。その途中、火を焚いたものと判断される。

すべての石を取り除いた後、V層の土をはぎ取る作業にはいった。上層部で田戸上層式の土器片がいくらか出土したが、遺構はなかった。

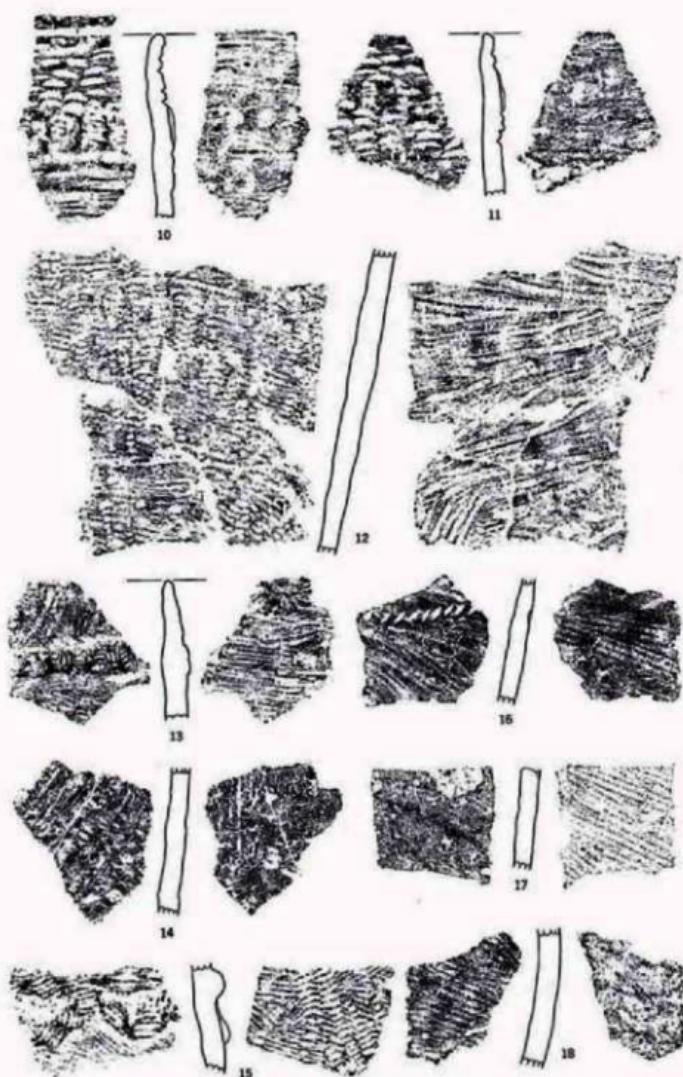
出土した遺物は大変多く、十分な整理は出来ていない。9・10グリットから出土した一部の土器片だけを掲載するにとどめた。

第4図は、9A区の集石中より出土した土器である。4は粕畠式に特徴的にみられる塔状把手である。繊維は他と比べて少ないほうで、赤みのない明褐色で、焼成はわりと硬い。6は富士山形の塔状把手の一部である。5は口唇部と外面に連続の刺突文を有する。5・6ともに丁寧な成形痕が残っている。いずれも茅山上層式。8・9は、条痕文というより条線文といったほうがよいような成形痕を有する、わりと赤みの強い色調の土器。

第5図は、10A区の集石中より出土した土器である。10～15は絶状体圧痕文の土器。10は口縁の少し下に一条の凸帯が巡り、この部分と口唇部には絶条体圧痕がある。凸帯とのあいだに爪形文が施されている。11も10とよく似ているが、凸帯が10より上部にあって、これを境に爪形の刺突が上下についている。10をII文様帯、11をIII文様帯といった文様構成として捉えると、該期にあっては古い要素を持っているといえる。13も同様である。12は分厚く、繊維が多い。外面絶条体圧痕がよく残っている。内側は外と同じ原体工具を引いて条痕にしている。13は細い条線による格子目状の文様がある。凸帯の上にも圧痕がある。14の外面にも圧痕が少しついている。15は、



第4図 9 A区IV層出土の土器 (1:3)



第5図 10 A区IV層出土の土器 (1:3)

該期のものとしては器形・文様ともに例を見ない珍しい破片である。凸帯の下端に、鎖を連接するように粘土紐をはりつけ、その上から原体を細かく当てている。内外の条痕はこの原体を引いてつけている。16~18は、内外に丁寧な条痕があり、いわゆる茅山系の土器である。

集石 環状集石遺構の東の端、17グリットに位置する（付図）。一部は調査区外に延びているものと思われる。卯大から掌大の安山岩礫10個を使用している。下部は径90cm、深さ18cmの浅い穴になっている。このすぐ南には厚さ5cmの焼土があり、本址と何か関係があると考えられる。

出土した遺物は土器のみで、いずれも集石の上面、礫に混じって表裏に条痕のある薄手の茅山上層期の土器片4点のみである。

小堅穴 該期の小堅穴は支谷の縁辺部にあって、環状集石遺構を取り囲むように記している。9基検出したが、これらのうちの多くは墓穴と目される。

3号 南側は中期のピットによって損なわれている。拳大から人頭大の安山岩礫と大きな土器の破片が穴の中央部分に集中して見つかった。

6号 底のほうが広い巾着形の穴。穴の中央部に集中して、蘭玉大から掌大の安山岩礫が32個入っていた。焼土が二層に分かれて観察できた。いずれもわりと硬くしまっていた。底部には上端の輪郭に沿って小穴が8個見つかった。墳底は平らで硬い。

7号 円筒形。穴の上面、南側から磨石が出土した。

8号 6号と同じ巾着形。南側は旧い穴を切っている。卯大から掌大の安山岩礫11個、蘭玉以下の小石18個が穴の西側に集中して見つかった。

9号 南側にピット状の小穴がある。安山岩礫が多量に出土した。蘭玉大から卯大37個、拳大から掌大11個である。このうち1個は底に密着していた。

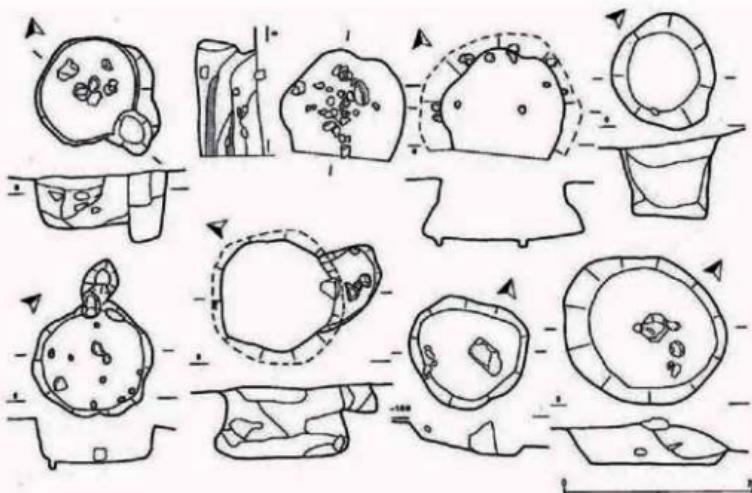
10号 穴の上面からは、大きな安山岩礫が出土した。下方からは、安山岩製の磨石と粘板岩製の石歯が出土した。

25号 中央やや東よりから、一抱えもある安山岩の大石が出土した。また、上面西側からは、安山岩の小礫が4個出土した。

35号 沢の最も内側に位置する。条痕文の土器片いくらかと、黒曜石の剝片・安山岩の小礫を含めて片手分ほどあった。墳底わりと硬い。

36号 35号に接している。単独ではなく、数基重なっているようだ。新旧はわからないが、最低3基はある感じである。早期の土器片がすこし出土した。

第7図は、各小堅穴から出土した土器である。19~24は3号出土。19はやや外反する平縁の深鉢で、口唇部に貝殻腹縁による刻みがある。内外面とも細い線状の条痕を有する。茅山系の破片。20は外面に二列、内面に一列と口唇部に連続刺突文、内外面に条痕による成形痕がある。粕烟系。23は結条体压痕文の土器である。外面は、原体を少しずつずらしながら押して織文風の文様をつけている。内面は原体を引いて条痕をしている。系統の異なる土器が併出した好例といえよう。25~31は6号出土。30は条痕文系土器の多い中、唯一、文様のある土器片。4本の浅い条線によ



第6図 早期の小窓穴 (1:60)

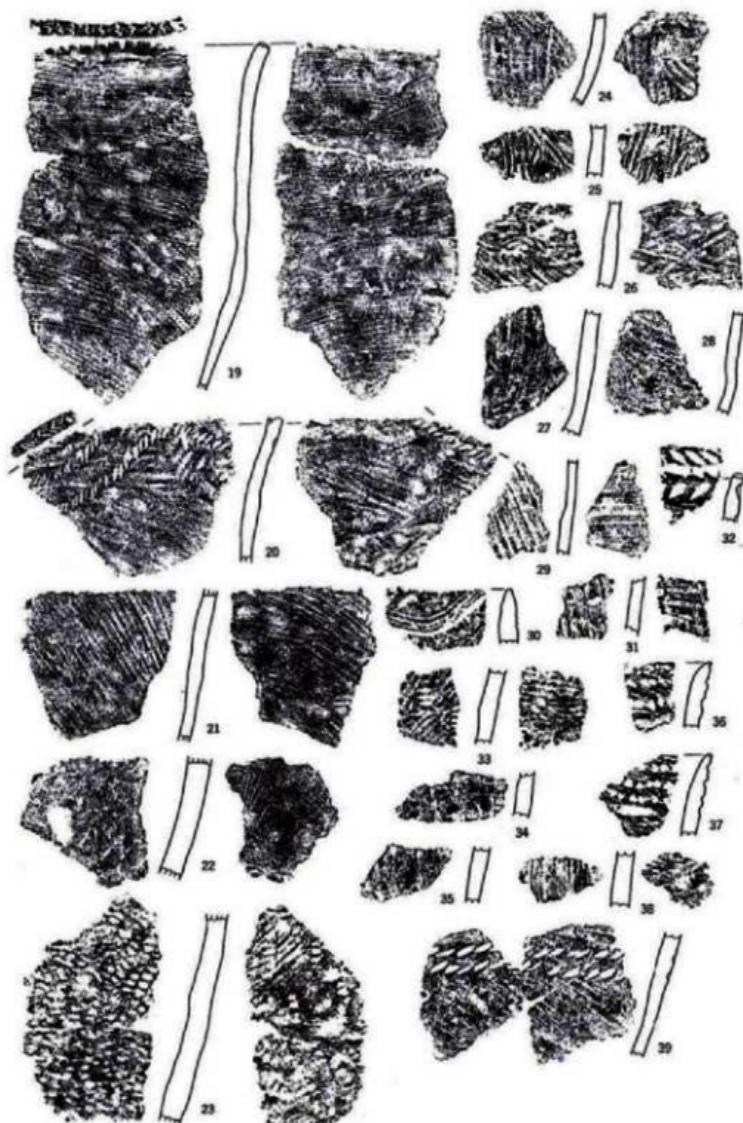
上段: 左から3, 6, 7 下段: 左から9, 8, 25, 10

る波状文。32は9号出土。外面に二列、口唇部に連続の列点文を有す。連続刺突文の影響を受けた新しい要素の土器片だろうか。34~36は8号出土。37は8A区出土で36と同一個体。茅山系の影響を受けた連続刺突文系土器。38・39は10号出土。39は幅狭な連続刺突文の土器。内外面ともに斜めの擦痕がみえる。

包含層中の土器群 包含層および各遺構からは、実に多くの石器、土器が出土している。そのうちここでは、9グリットまでのしかも一部の土器についてとりあげてみた。いくつかを除きみな早期の茅山上層段階に属す土器群である。

第8図40は、表裏繩文の小破片。外面は列点状の二列の刺突がある。原体の先端を押圧しているのか、別な施文具によるのかは不明。内面擦糸。草創期の土器片。橙色。焼成はよくない。41~43は鶴ヶ島台式のかけら。いずれも、口唇部を平坦に成形している。縹緥の含有量は他と比べてすくない。44~52は列点状の刺突を有する土器、列点文系として一括した。44・45は押引風に、47~50は櫛齒状に施文している。内面には二本一組の沈線文がある。47は文様を下端で区画しているようだ。

53~55は沈線文系。53は細い櫛齒状の施文具で2列に連弧状に文様を付している。6号小窓穴に類似品あり。54~57は、V字状に下端で収束するような文様の施文をしている。54~56の口唇部には、施文具を置いていたくらいの僅かな刻みがある。また沈線文系の口縁部は、41・42をのぞき、先尖りのつくりで共通している。59の外面には幾何学文様が、内面には列点状の押し引きと凹線、



第7図 小野穴出土の土器 (1/3)

縱方向に等間隔で、二本組の凹線文が施されている。風変わりな土器である。60・61は同一個体。か細い線の格子目文。外側光沢があり、チョコレート色の鉱物が入っている特色ある土器。62は縞杉文のあるミニチュア土器。口唇部に刻みあり。63～65は、文様の下端を区画する横方向の区画線がみえる。区画が先行するのが65で、後行するのが63である。

66～78は絡条体圧痕文系。66は外側にお焦げが付着している。口縁部から凸帯には、絡条体を少しずつ転がして、縞文風に施されている。内面は絡条体による条痕。67～73は「へ」字型の絡条体圧痕。67・68・73は絡条体圧痕による貝殻腹縁の置換。73の地には、絡条体による横方向のか細い条痕がみえる。一部斜めになっているところもあり、文様を意識しているのかもしれない。75～78は凸帯の付くもの。75の一部には圧痕がみえる。77の凸帯には、太い沈線風の刻みが付けられている。

第9図は、連続刺突文系を主に、一部底部と条痕文を載せた。殆どがいわゆる粕畠式に比定される段階である。

79は塔状把手の部分。連続の刺突文が表裏と口唇部にある。外側、把手を中心逆三角形の構成をとる。内外面ともに丁寧な条痕がされている。80は外面二列、内面一列と口唇部に刺突があり、口唇部によって幅狭な文様構成をとる。

81・83～86は、富士山型の塔状把手の部分である。81は少し幅のある、二条の連続の刺突文。波頂部に小さな把手があり、浅い細かな刻みがある。79は、把手を中心逆三角形の連続刺突文の文様がある。塔部の左右、すこし下がったところに瘤状の突起がある。該期には類例がなく、興味ある破片。89・90は同一個体片。波状口縁で、二条の連続刺突文と口唇に刻みを有す。波頂部は口唇を尖らせている。90も波状口縁部片。内外面に連続の刺突文を有す。外面、連続刺突文のうち下二列は、列点状の刺突である。

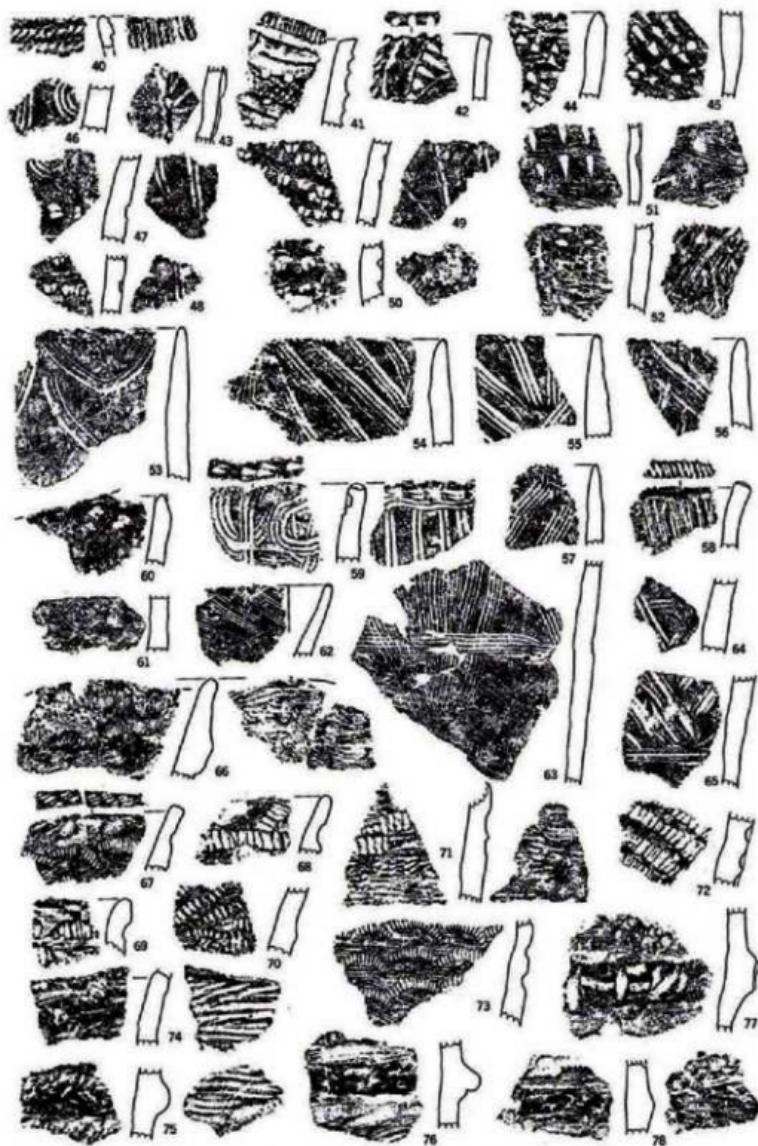
91～93は内外面条痕のみの土器片。91・93は、口唇部に刻みがある。97は、指の腹でつまみだして鋸歯状にしている口唇部の破片。上ノ山式の文様手法である。

94～96は尖り底の部分。94は砲弾型。95・96は乳首型。94は多量の纖維がはいっているが、95・96は少ないほうだ。

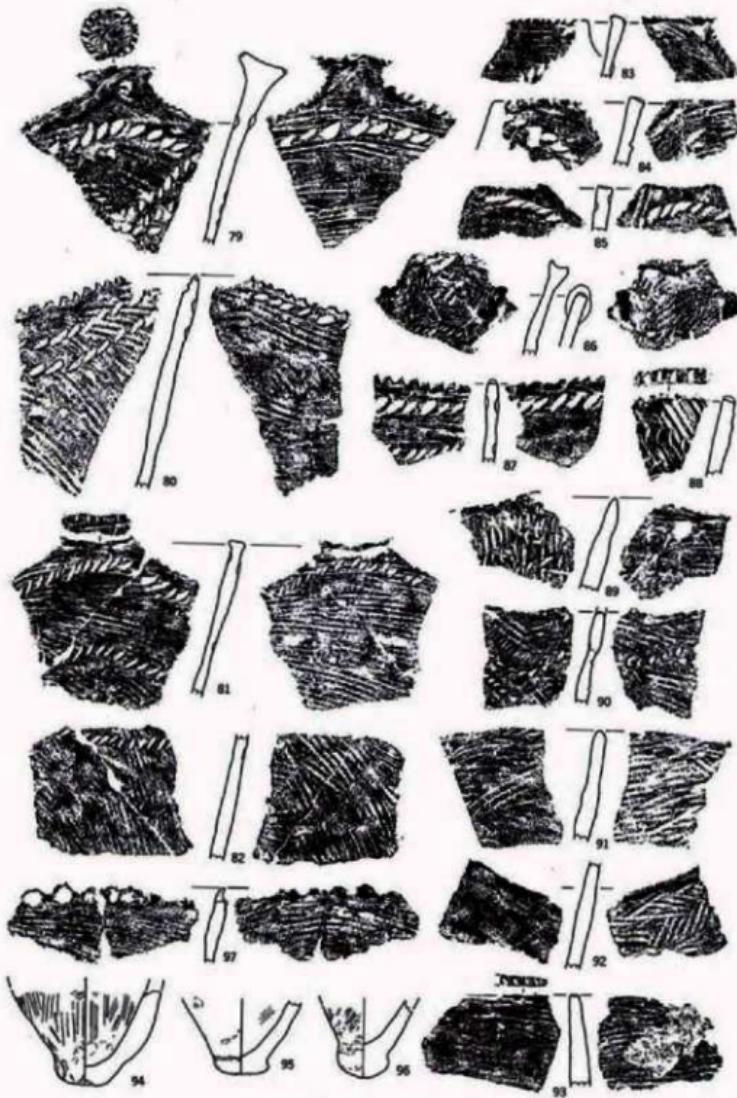
以上、包含層中の土器群を概観してきたが、草創期の表裏縞文片を除いて、他はかなり接近した時期の土器であることが判明した。更に言えば、鶴ヶ島台式の3点と上ノ山式の1点をのぞくすべてが、茅山上層期に属することが明らかとなった。

このことから、該期の形式的な内容について記せば、茅山系と粕畠系の土器群に絡条体圧痕文系土器が共存するということ、さらに文様要素では、条痕文・連続刺突文・絡条体圧痕文に、刺突文系・沈線文系が加わるといったことが判明した。

諏訪地方において、これほど纏まった資料はないが、同時期もしくは接近した時期の遺跡として、茅野市の頭殿沢遺跡の貝殻腹縁文系・絡条体圧痕文系、やはり、同市の判ノ木山西遺跡の沈線文系の土器群を挙げることができよう。本遺跡を含めたこれらの形式的内容は、八ヶ岳山麓の



第8図 早期の土器 (1/3)



第9図 早期の土器 (1/3)

茅山上層期を代表するものとなろう。

縄文時代中期

第13号住居址 井戸尻遺跡の第一次・第二次調査からの継続番号を採用して、13号住居址と付した。本址は、5グリットの発掘境に位置し、その大半は調査区外にあり、調査した部分は床面の一部と柱穴一本である。

壁際には浅い壁柱穴が9個検出された。床は硬くない。遺物は、石器と土器片が少し出土したものである。出土した土器から、本址は中期の貉沢式期に属す遺構である。

小豎穴 該期の小豎穴は18基検出された。この他、時期不詳の穴が10基あるが、大半は中期に属するものと思われる。早期の小豎穴より標高の高い西側に群在する。これらのうち、墓穴となるものが幾つかある。

1号 13号址の西側にあって、約2分の1は調査区外である。西よりの底部からは、片面に礫皮を残している硬砂岩製の石歯が出土した。他に押引文のある貉沢式の破片や、赤色漆の残る有孔鉛付土器片が出土した。穴のすぐ南には、掌大の安山岩礫の入った小穴(34号)がある。

2号 1号の東にあって、約4分の1は調査区外である。底部からは、貉沢式の破片とホルンフェルス製の輪形石器が出土した。北側、発掘境から底に密着して土器の底部が出土した。

4号 柱穴状の穴。硬砂岩製の石歯、粘板岩製のツルハシ状石器、スレート製の石包丁と石器が多く出土した。最大径60cm・深さ62cm。これに対応するのは3号東の穴で、距離は2m30cm。

5号 精査時、掌大の安山岩と土器の一部があらわされた(第11図)。周辺を少し下げるとき、穴の輪郭が見えはじめた。土器は3分の2しかなく、故意に割られたもののように、あたかも遺体の上に並べおかれたかのようだ。長嗣で壺形、新道期の有孔鉛付土器である(口絵)。

11号 南壁の発掘境、9C区にある。新道期の土器片いくつかと、粘板岩製の石器片が2つ出土した。また、ほとんど調査区外にある隣の穴からは、土器の底部片と卵大の黒曜石の石核が出土した。

12号 11号の西側にある。平出III系の土器片と卵大の安山岩2個が出土した。

13号 掌大より少し大きめの安山岩礫1個と、土器片が出土した。

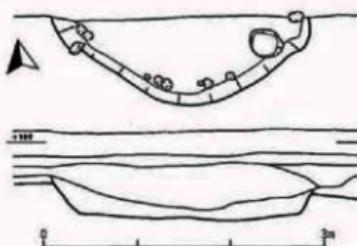
14号 磐岩製のくさび状石器とホルンフェルス製の石包丁が1個ずつ出土した。

15号 南壁の発掘境、8C区にある。完形の石うすが伏っていた。粘板岩製で身の薄い石歯と硬砂岩製の石器片、貉沢式の土器片がいくらか出土した。

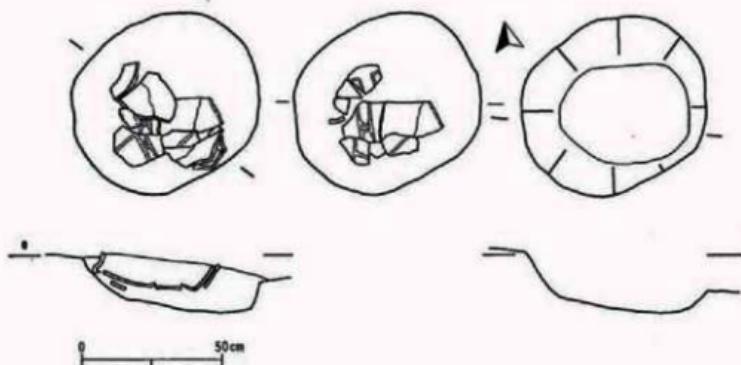
16号 15号に隣接している。黒曜石製の分厚い石鐵様の石器と蘭玉大の安山岩1個、加曾利E III式の土器片が出土した。

17号 一部は調査区外である。粘板岩ホルンフェルス製の石器片2片と、卵より小さい安山岩8個、新道期の土器片がいくらか出土した。

- 18号 霧大の安山岩1個が出土。
- 19号 粘板岩製の石器片1個と
薦玉から掌大の安山岩5個が出土した。
貉沢式の土器片がいくらか出土した。
- 20号 柱状の穴。黒曜石の剝片
と石核、チャートの剝片と中期前半の
土器片が出土した。

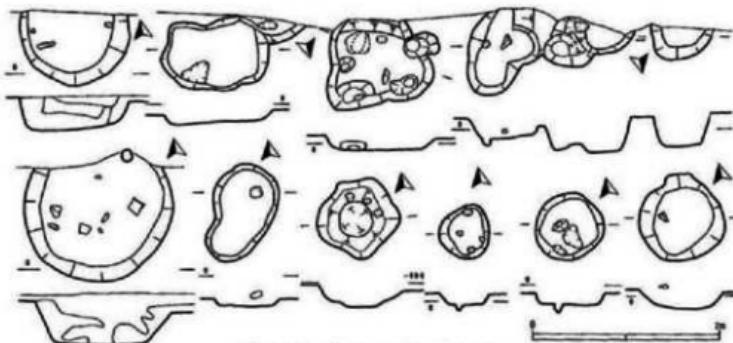


第10図 第13号住居址



第11図 5号小竪穴 (1:40)

- 21号 輝緑岩製の棒状礫石器と貉沢式の土器片がすこし出土した。礫石器の両端はざらざらしていて、叩石のようである。
- 22号 底が一番低くなるすり鉢状を呈する。粘板岩ホルンフェルス製の礫器と九兵衛尾根式土器片がいくらか出土した。
- 23号 17号に隣接する。石鍬、霧大の長石、薦玉大の安山岩3個と、貉沢式の土器片が7片出土した。
- 24号 穴の北側によった場所から、掌大の安山岩礫が出土した。礫の縁辺は人工的に打ちかかれている。
- 28号 長径57cm・短径52cm・深さ12cm。填底、立ち上がり部分に4個の小穴がある。
- 29号 正円に近い。真ん中の小穴から、土器の把手が出土した。深さ10cm。
- 遺物集中区 11から12グリットにかけて、半完形の土器や大小の土器片のほか、いくつもの石器や安山岩の礫が散在していた。これらはみな廃棄されたものと判断される。この遺構の上面



第12図 中期の小豈穴 (1:60)

上段：左から1, 11, 15, 16, 17, 23

下段：左から2, 24, 22, 28, 19

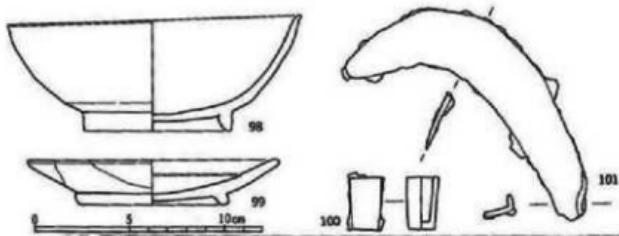
には、8から13グリットにかけて拳大から人頭大の礫が散在していたが、これとの関係も無視できないようにおもわれる。

平安時代

16Aグリット、III層の上面からは平安時代の灰釉皿・碗、鎌・石突が一括でしかも狭い範囲から出土した。周辺を精査したが、住居址や穴など遺構を検出することはできなかった。

遺物がまとまっていた場所、灰釉の碗の出土したすぐ近くの東側からは、人頭大の安山岩礫が一つと、およそそこから1mほど離れて、東から北側へ安山岩の礫が弧状にあったのみである。いずれにしても、出土した状況から、なにか祭事をおこなった場所ではないかと推測される。

98は灰釉陶器の碗。割れていたためすぐに取り上げてしまったが、灰釉皿同様、正位で出土した。もともと完形だったようだ。高台部分のつくりがわりと雑である。99は灰釉皿。部分付けされた白色の釉薬がとても綺麗。口唇部は厚ぼったく、内側に段を有す。この皿から10cmほど南、皿を取り上げたらすぐのことろに100の石突があった。第てはいるが保存状態は良好。重量感が



第13図 平安時代の遺物 (1:3)

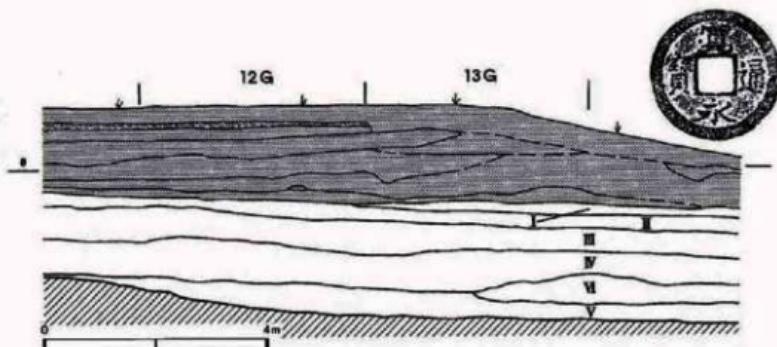
ある。Ⅲの60cm南からは、101の鎌が元の方を北に向けてやはり正位で出土した。完形の鎌は足場遺跡に次いで二例目。

近世

12Aグリットからは、開田の際に埋めた土の最下部、II層とのあいだから、江戸時代の前期に鋳造された銭貨の「寛永通宝」が一点出土した（第14図）。

汐状遺構 調査区の東側、沢に向かって緩く傾斜する地点の16から19グリットにかけて沙が見つかった。沙内には、拳大から人頭大の礫が多量に混入していた。これらの礫に混じって、縄文時代の石器や土器片のはか、天目茶碗の破片や内耳鍋の破片が入っていた。

のことから、本址は開田時に作られたか、それ以降に田の排水処理用として作られたものと思われる。



第14図 開田時の埋土（トーン部）と最下部から出土した銭貨（1:100、原寸大）

3 成果と課題

井戸尻遺跡は、過去二回の調査を行っており、昭和41年に国指定史跡となった。今回の調査地点は遺跡の末端であり、遺跡の範囲を捉えること、遺跡の性格を知ることという点においては、一定の成果をえることが出来た。

まず第一に、遺構は尾根の末端までいっぱいに展開しており、全体が厚い遺物の包含層であるということ。これは調査の進行を妨げたことは言うまでもないが、層の厚みと包含している生活遺物の質・量が多様である点、長期に亘る定住生活を裏付けるものであろう。

第二は、早期の環状集石遺構の発見であろう。早期のものはこれまでになく、また中央に人工的な盛土を有するというのも例を知らない。環状集落による円環構造と同じであることから、同

様の意味が考えられる。

第三は、旧石器時代の生活遺物の発見である。町内には同時代の遺跡がいくらかは存在するが、今回のように発掘によって得られたものは数少ない。当遺跡では尾根の末端から出土しており、旧石器時代の行動範囲、占地のありかたなど他の遺跡と比較する時には参考となる。

加えて、出土した草創期・早期の土器群であろう。これまであまり知られていなかった茅山上層期の一括資料によって、型式学的な内容が明らかとなったことは大きな成果であった。

道路幅という限られた範囲の調査ではあったが、全国でもはじめてという遺構の発見もあり、保存出来なかったことは大変悔やまれるもの、未調査区域を含めて、国指定史跡として十分な内容を保有した遺跡であることが判明した。

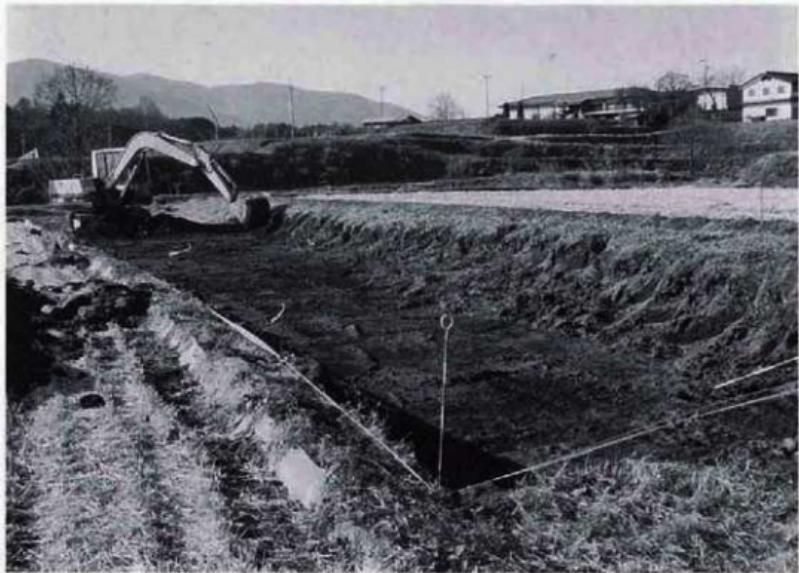


上空からみた遺跡と周辺（中央が井戸尻遺跡）

図版 2



遺跡近景(東より)



表土剥ぎ

図版 3



環状集石遺構（西方より）



環状集石遺構（南方より）

図版 4



早期の小整穴（北方より）



早期の小整穴（北西より）

図版 5



3号小竪穴



图版 6



8号小竖穴



10号小竖穴

圖版 7



25 号 小豎穴



図版 6



ブレイドの出土状態



中期の遺物集中区（東方より）

図版 9



中期の小窪穴と第 13 号住居址



5 号小窓穴の有孔鉢付壺の出土状態

図版10



平安時代の遺物出土状態



灰釉皿の出土状態と周辺の状況

図版11



沙状遺構(北京から)



沙状遺構(東南から)

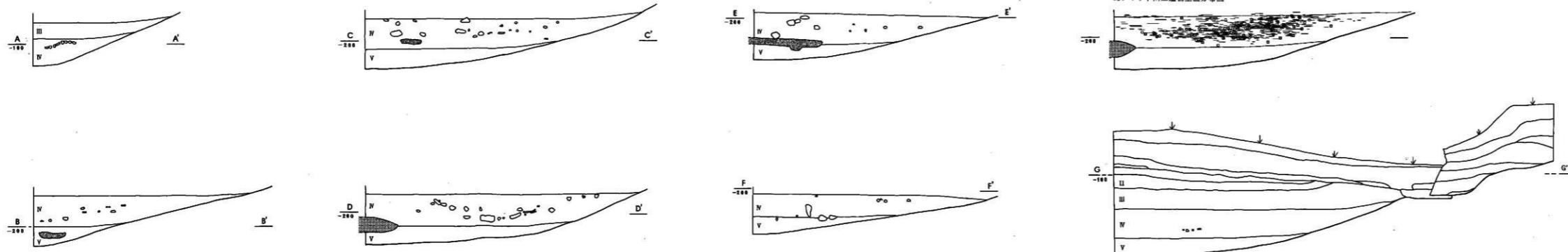
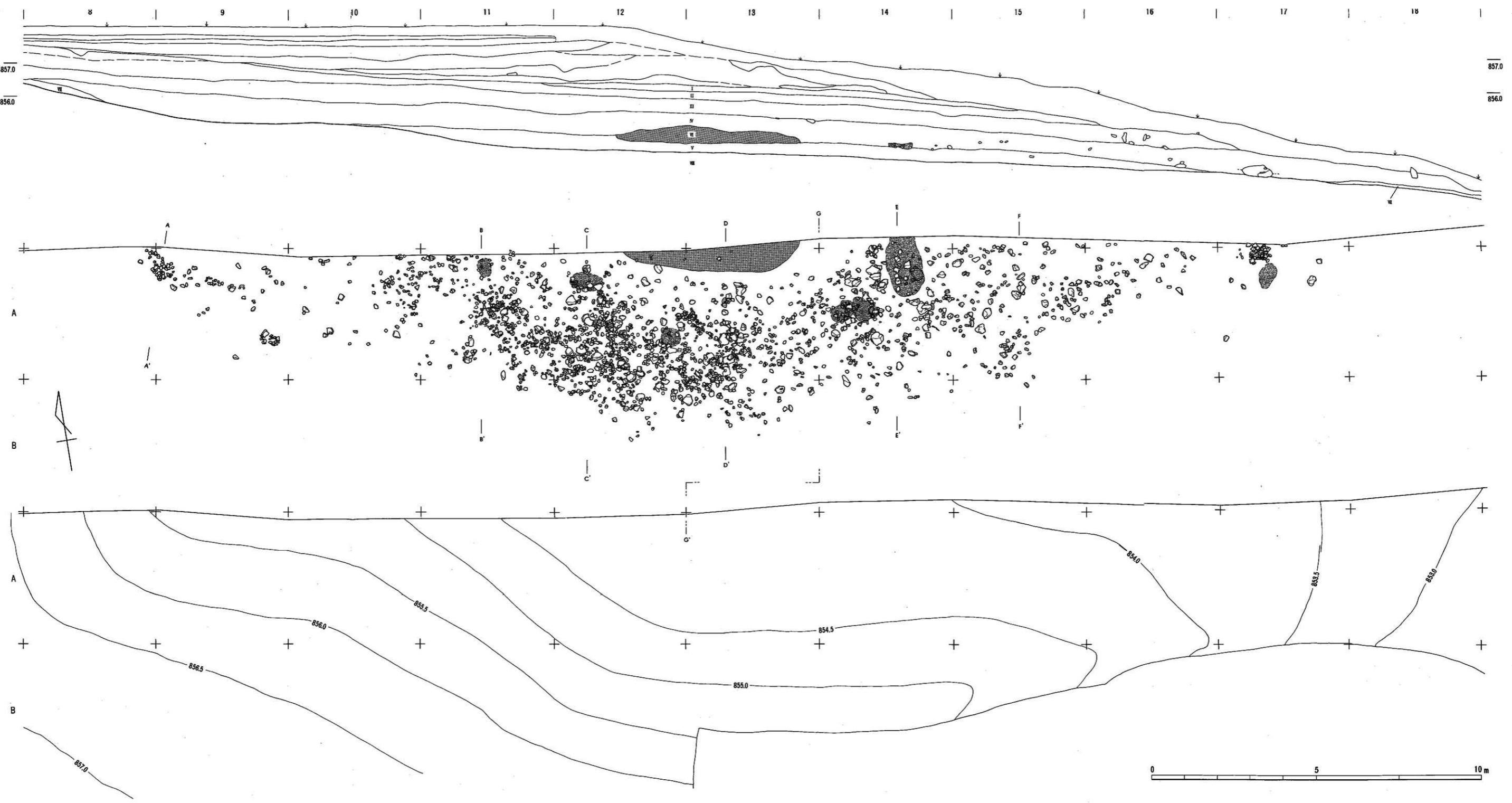
図版12



中期の遺物集中区の調査



V層の除去作業



凡例

- 縦長さ、下端
- 土器
- 石器

土壤説明

- I 暗褐色土
- II 黒褐色土
- III にふい黄褐色～黒褐色土色(ローム粒を含む)
- IV 褐褐色灰土～赤褐色(灰粒、小豆大のローム粒を多量に含む)
- V 黑色土(大大的ローム粒を多量に含む。少量の灰粒を含む)
- VI にふい黄褐色土(小豆大～爪大のローム粒を多量に含む)
- VI 明黄色 ローム
- VII 明黄色 ローム

◎ I層の上部は開田の際に埋められた土。一部については分層線が引かなかった箇所がある。

付図 環状集石遺構平面図(1:600)